

繪本西遊記

初編

五

2500
40-5



2500
業同

小前田先生編 金小二郎一代記 三十 大尾	新説伊藤専三編 星五郎一代記 五十 大尾	怪談牡丹燈籠 三十	鹽同 多助一代記 四十 大尾	業同 文治一代記 全
-------------------------------	-------------------------------	--------------	-------------------------	------------------

大岡小西屋政談 十二	近世小説 河内山實録 五十 大尾	一御花... 年... か... 翻... 仕... 御... 月 日
---------------	---------------------------	---

繪本 星月夜顯晦録 三十 大尾	大郷穆編 燕山外史 二冊	東京橋區弥左門町十三番地 文永堂 同牛込區細工町十六番地 誠光堂 池田屋 清吉
--------------------------	--------------------	--

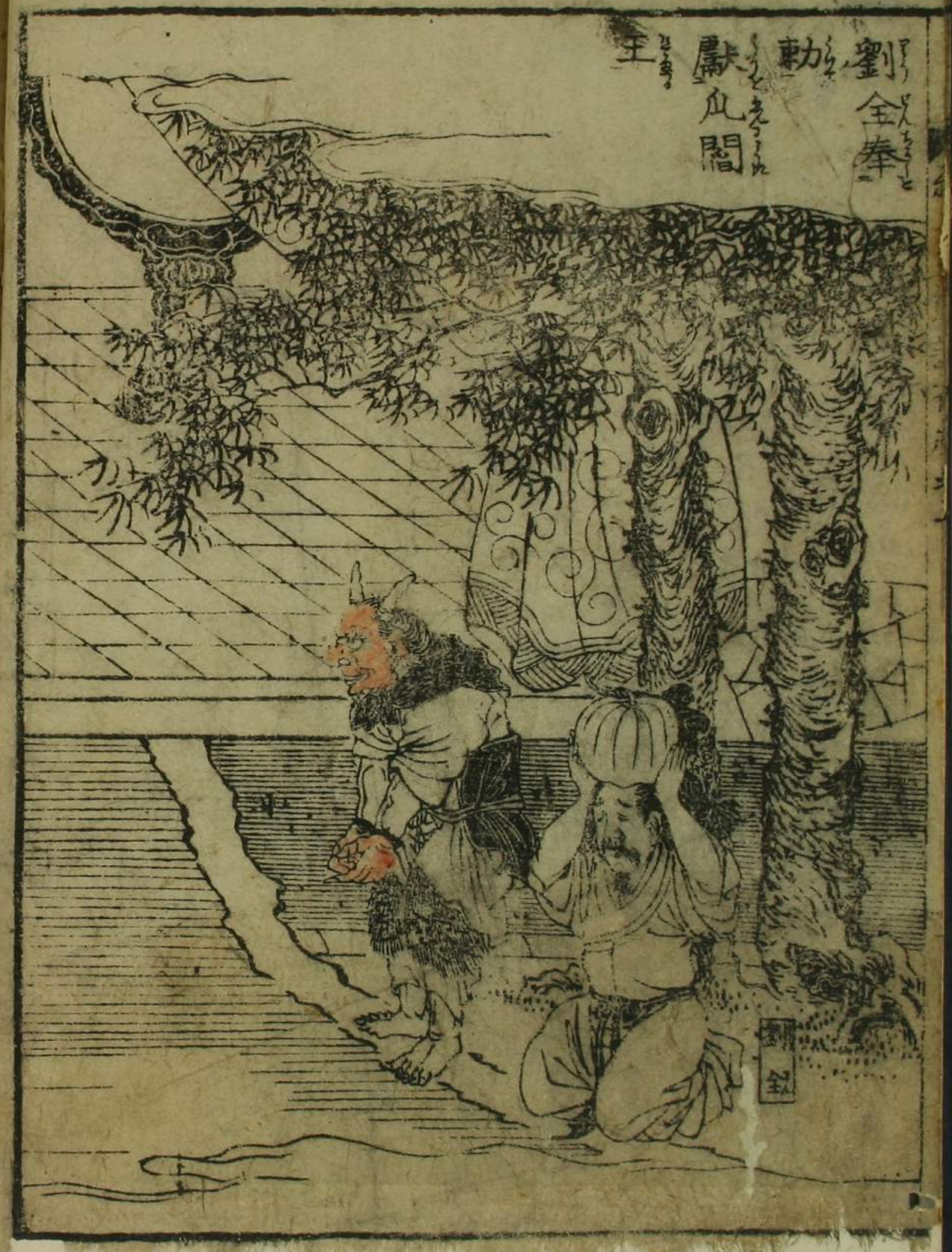
和漢
書物
小説
貸本所

繪本西遊記初編卷之五

清

前章之下

均州の住人に劉全といふ者あり其妻李翠蓮といふ者自か...
頭にかざせし金の釵を取く門前の僧に親しむと怒りさぬ...
罵り取らざれば書いとせぬとありて遂に盗く丸をりたる劉...
全これを見て今又辱世の事のごとく致す死せざる事あり...
おろろ太宗皇帝陰司にて閻王に山菓を送るべきは召束らりて...
選りよむ命と捨てぬといふ事も閻王に山菓と獻する者や...
番く大下とともとりむらりの劉全幸ひの事にありし長安に至り...
山菓と持く陰司に赴くべき旨奉る事も...
此果と持く陰司に赴くべき旨奉る事も...



むひやうと劉全が頭に一つの此果と頂を毒ととりて死せしむ
 るもされば劉全が一點の魂魄此果をかへらに載き地府森羅殿
 に至り閻王に呈ししをれば閻王大喜にうろこびれり劉全より出
 陰司へ来りて由來とらじくたげの毒の事翠蓮が魂とめて劉全
 に對面させ生死の簿子開き傳に壽命いまだ一息に鬼使に命じて
 渠二人の魂を陽間に還せし下知せられけるに鬼使中て曰く翠蓮
 蓮既に死して日久し其屍を失ひたり何もの所ての魂とて入りし
 閻王の曰く唐王を宗の妹李玉英が命を縮め玉翠蓮が魂を收じ
 返し鬼使かきこりて二人の魂と提長安城にありし劉全の魂と其
 屍にかへ玉まはり内院へ入し玉英皇主を尋ねにけし玉皇玉宮庭
 前の池を渡りて快く徘徊し人々を鬼使さすの姿と推倒し魂と

引けり出し翠蓮の魂とまはり入るに陰司とてこひまりたる
 大宗皇帝とらるればありさぬと見え玉皇皇主とを剛絶して
 死するぞ杖をやくとて自り庭以下より白皇后宮壇はしをめて
 さあぐに介抱られれば白王衛に獲生さひを宗とてて大さたお
 ころた抑你等何人なれば我を以所れいざさひ奉もるやゆか
 るとと逃げれば大宗も甚き驚馬さきさひと取て引をり付ま
 何事と云や我ハ你が兄をたりの嫂なり思ふ者にいつはと云ふ
 ども皇主とのゆのに我え未見もたき嫂もは均加の民と翠蓮
 蓮より女我夫の名に劉全とて大宗皇帝の作と此等り閻王此
 果と献し陰司とて不側の對面をばし大歸の海とて陽間に入り
 有りて通して大劉全とて人夫を以謀くさるに奉もるかへさせり



翠蓮 玉英 交易 魂魄



歎く所二箇の官人きりあり閻王に瓜果と献せ劉全只今蕭
朝門にありいと羨望のこころ宗是とすていふおとほききり
則劉全とていふも玉英白主に相合されば皇主劉全とて我
何處にかれおむいしやとさうよりてさめくと哭く不だ劉全
まて大きにおとろれ其声い書の李平運に似られり其人は
たふおぬいしやんまき雲の上人何といふあらとて唯あされに
つされ果忙然して言葉はた宗は始終と御座ありて前に眞
途そ閻王の吾妹が命を危うくと伝ていふ今の不測に的
まそそ奉の子細を語りせ遂に皇主劉全に賜りしれはま
婦ともともはるこかきりさく恩を謝しと俱に故々回りり

唐王選僧修大會

觀音頭像化金蟬

爰に河南開封府とる所の水と賣く生業とる相良といふ者
あり書の張氏と共に佛をそとて命を救ふ食の外ハ
家に御使とて僧お連れ佛に供養しとてに畜る日の一
時に長安城より胡敬徳とら大臣太宗皇帝の命とてけね百
人の人おねねの金銀と稱ひとて相良があばらみり四方に
高く積るるの勅使なりといひりくねと相良手入婦大さなおそれ門
外にやろひお慄るる我き命を候胡敬徳相良に向ひ主上を宗
皇帝你に借らせると所の金銀と其の命とて只今かつて後と
謹ぐと受けむとてのつれが相良再び作天の野入るるを負給

帝以敬德
賜金相良

卷之四十四



敬德

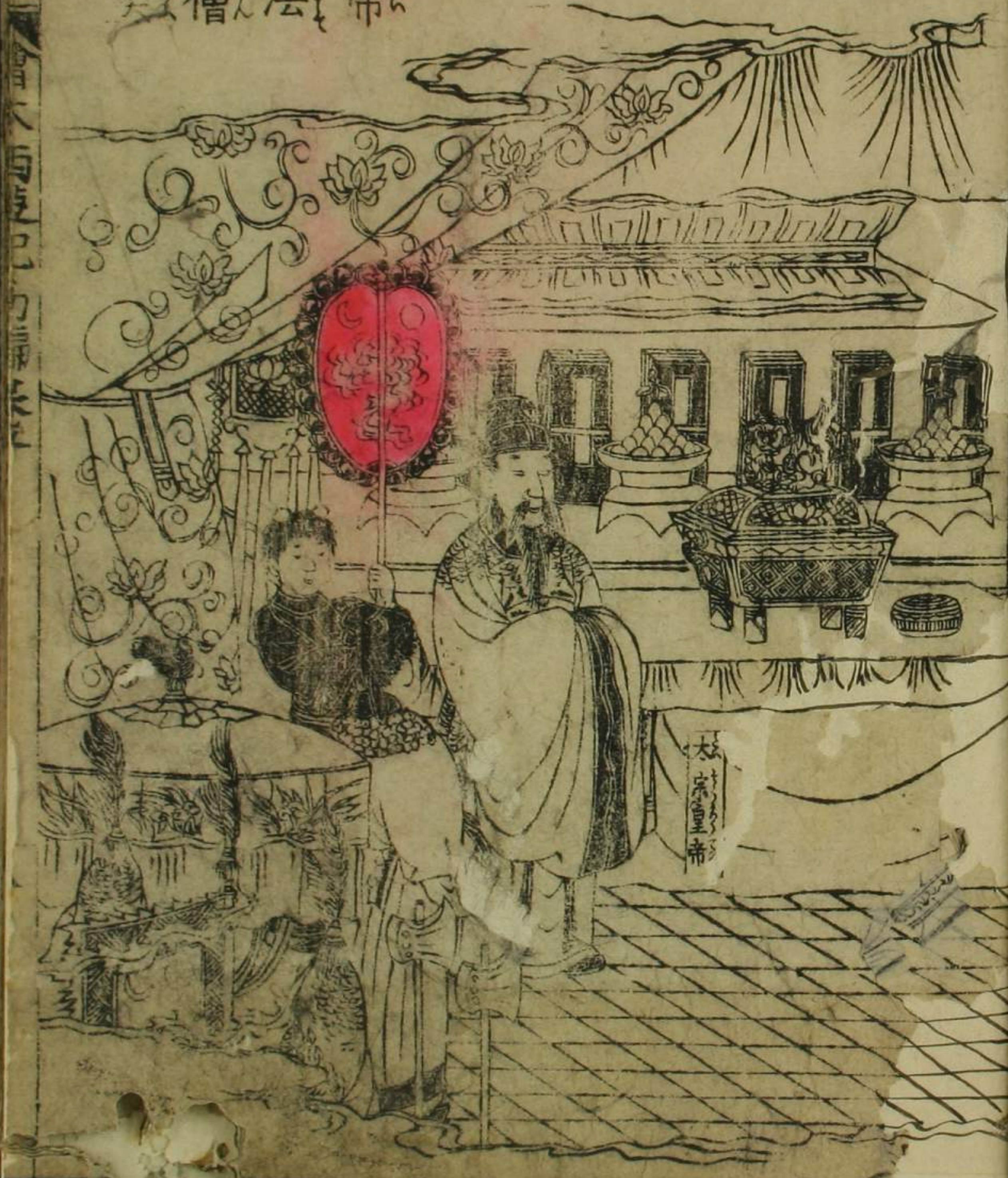


相良

多くむじりたり一徳の財は何ぞ大唐の天子へ金銀をかきまはさ
 是の人はたがごとく多くとりたるに故徳の曰你何ぞ現在世に天子
 多の金銀を借するべき你平常僧より佛に供養する財
 十三庫に充たり王上はに真途に至りむ
 其一庫の金銀をからせむひ今其負おと合く返す者あり
 只よりく是とす初むべしとあれど相良は合く返さず高
 歳爺たしく陰司と金銀を借するに證據されなし
 吾命とせむとくともそれるまき金銀を得てとあやうくとこ
 多くふきまはせは是に後く使とすくこの起と太宗皇帝
 の奏聞とれば太宗即涼がむに寺院と建さし僧とて供
 養とすと詔ありたれば故徳は其金銀とすく一大寺を

建さし勅建相國寺と号し今も現然たりおと太宗皇帝
 の圖王の瓜果を送り相良に金銀を返す今施餼鬼と修行
 多し法司の約束を修りすとて天下の僧とかりとあり
 其中より選りて壇主の西方金蟬長老の轉世法持
 禪師則陳光法が子殷用山の外孫たりは貞觀十三年九月
 三日化生寺に壇とひらき一千二百人の僧とありし施餼鬼の丈
 會と執りひるむる觀音菩薩の法持法師が通すまこと
 とすむひ如来より賜り錦襪の袈裟九環の錫杖とすはり
 持て本又と便に疥癩の僧に化し長安の東門に往て
 加衣袈裟錫杖と賣らんとむり法持は太宗の化僧とす
 加衣袈裟錫杖と賣らんとむり法持は太宗の化僧とす
 加衣袈裟錫杖と賣らんとむり法持は太宗の化僧とす

天皇
修
逢
僧
位



天皇

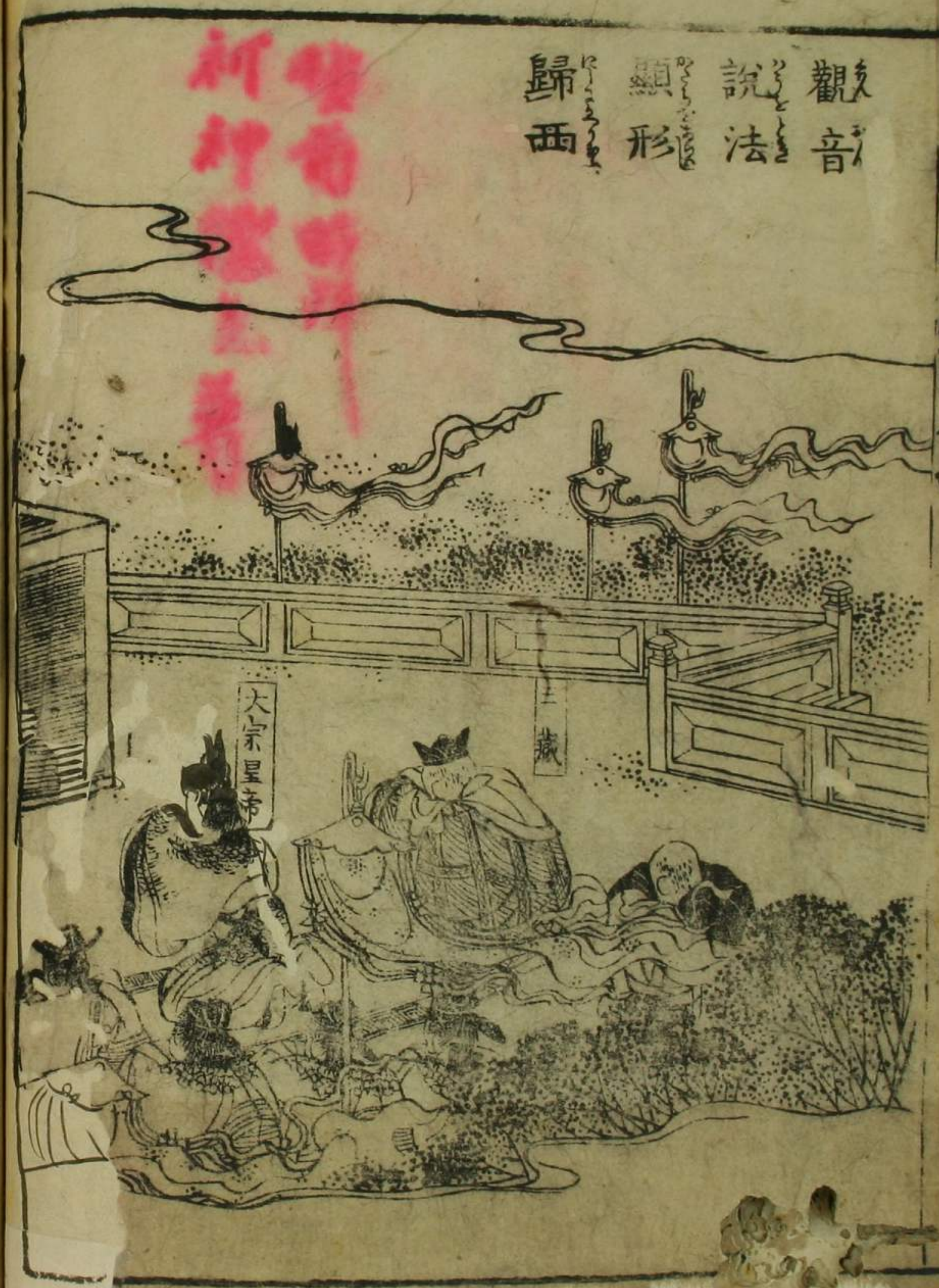


天皇

何ら依り求むるに依ては其の價と同一なる
觀音菩薩を宜くか衣の價五千兩、袈裟の價二千兩、
陛下佛門を歸依し高僧と崇敬し、後へそのつりかゝるに價は
おとらば、献上するに依り、陛下の僧侶、法師、
乗の法のこと知りて大乘の法といふこと、
青寺、我佛如来の許に三藏の真經あり、是則大乘の佛法に
て衆生成佛の真法なり、陛下德行の僧侶、命じりて、
三藏の真經ともやあらむと宣はせ、宗法を承け、
你已大乘の法を知り、多寶臺に上りて法を説く可き見
菩薩とにも、禪にも、金色の光りを放ち、
に、佛瓶、揚柳をさきけ

觀音菩薩の本相を現し、
西天へ還り、玉座を宗とせ、
文武の百官僧侶男女大地にひも、
薩と唱る声き、
觀音の画い、
一の、
善果と修行と、
たうとら、
奏聞と、
と選り入る

會本西遊記



太宗皇帝とろくろの官人と共に國の外まで送りしをひきかへし
淨土を賜り勅して富人の酒の僧家の制をさしおけ一杯の
餞別をうけ快飲して別をの情と愛をこし且三藏の眞經を
賜ふ你をれが今より三藏と号べしと作られば玄奘法師君恩の
深きに及ばぬ止むがごとく太宗皇帝の禱謝しきり衆人の
と告げ西方にでて出行り

陷虎穴金星解厄

雙岫巖伯欽留僧

とる程に玄奘三藏の行儀をうけし旅のやとせしとともあはれ
出て白馬に勝りて從者二人を引具して数日をたして唐國の西の
界河沿の地に着てふ所の福原寺といふ寺院に一夜を宿り

去のめの鶏の音に打覺きてまて馬にのりて出陣し
秋の長きおすれが鶏の鳴きと尚もやく霜を踏む月を詠し
しる高山のよらの月をみ入に忽三藏白馬に乗りかたりて從者二
人をとももに一つの坑坎に陥りたりといひせんともあれは
洞の奥に声ありてよく橋をたてて伴もともゆる不どれ其かたら
とぬくればおそしき妖邪五六十人おそり三人をとりて魔王の
前へはれ行らるおそしき頭とよく是とそるに眼の電のごとく
ア急い雷の如く左右の牙とどろく現る釣の如き丸をひらして
掴まひんといふ時に外面より按内とて熊山君特處士とされし三藏
て二箇の粧物入来り何事とやおぼしめし三藏二人の從者を
列し喰ひ東方既に明まるところ時しすこの妖怪何と



太白星



海流

倭装 魔穴 失從者

白言

ともなくかきけりて見らばなりぬ三藏一人地はひきと今や
雲の爲に命を失ふると人ん地もたかくお世に忽ち怒りて一人の
老叟天下り三藏がまどろりと坑の外へ引連れお先を歩かす
此所ハ雙嶽嶺を号して虎狼のおほきなるふたりの坑の中なり
魔王寅ね軍とて山猫の精なり外より来る特處士とて六野牛の
精熊山君ハ熊罷の精なり你が本性元明なるに依りて
あたらば吾ハ西天大白星なりと云うとありハ一陣の風にほれ白鶴
は乗りて西の方へ飛ゆとて三藏奇異のおもひをば天よりひく
礼ね馬賊を率てまご山中と半日斗りゆらるるがらふと前
より二足の大虎咆々々吼るる雷の如く後の方よりハ數十丈
の大蛇はまひらき蛇を吹て追まゐる三藏驚き塊もろに保に今や

命とららうと見らば忽に不思議や虎も大蛇も何れも驚きたる
ありとて谷の蔭へ一糸に逃たり三藏大きに怪しむる極
歎悪蛇の怒る者いりたる妖怪やと頭をかして是をさすれ
一人の大漢子よに綱又を拿腰ふ弓箭とかけ山上よりあや
まろ三藏再降して信令の恩を謝し貧僧ハ大唐皇帝の勅とて
西天に往て佛をおし眞徑と求る者なりとす之ハかの漢士も
礼と返り某ハこの山の獵師劉伯欽とす者なりと云ふ山乃
虎狼其外の獸類我をえていかさらば思も逃走する長老を
寄介我家にすうて骨をを休むとて入ふに忽ち山間より土風
吹まり一足の斑斕虎跳き出たり伯欽是とて長光をまて某の
ハ虎を刺殺とて是とて綱又をひらめけて前よりいれ



伯欽勇猛
虎蛇恐怖

言部

大虎吼て血を搦て死びうろを洞又としく向我ひしめ
撮合しよじもの大虎力も終ふ伯欽に刺殺る三藏を
見く大さに驚き足下の勇壯真に鬼神の正と称歎し伯欽
に誘われ架り住家に入りよ伯欽が老母を去りに收ひ幸
うな明日へ伯欽が父の正當忌日に中ある今月我らた
三藏をかくして逃いんとて齊飲の用意をりぐつとた
三藏ねんご後に讀後し翌朝う馬に乗て立出よ伯欽使
三人の家僮を引けれ後に軽く送りよせ行奉る日ふして
一箇の大山あり其高き奉天といろく山路九折し嶮難
かりなりけ山の半後上りけ伯欽三藏に向ひて中るハ山ハ
西界山とて東半邊ハ唐朝の地西半山の魏朝の地なり魏朝

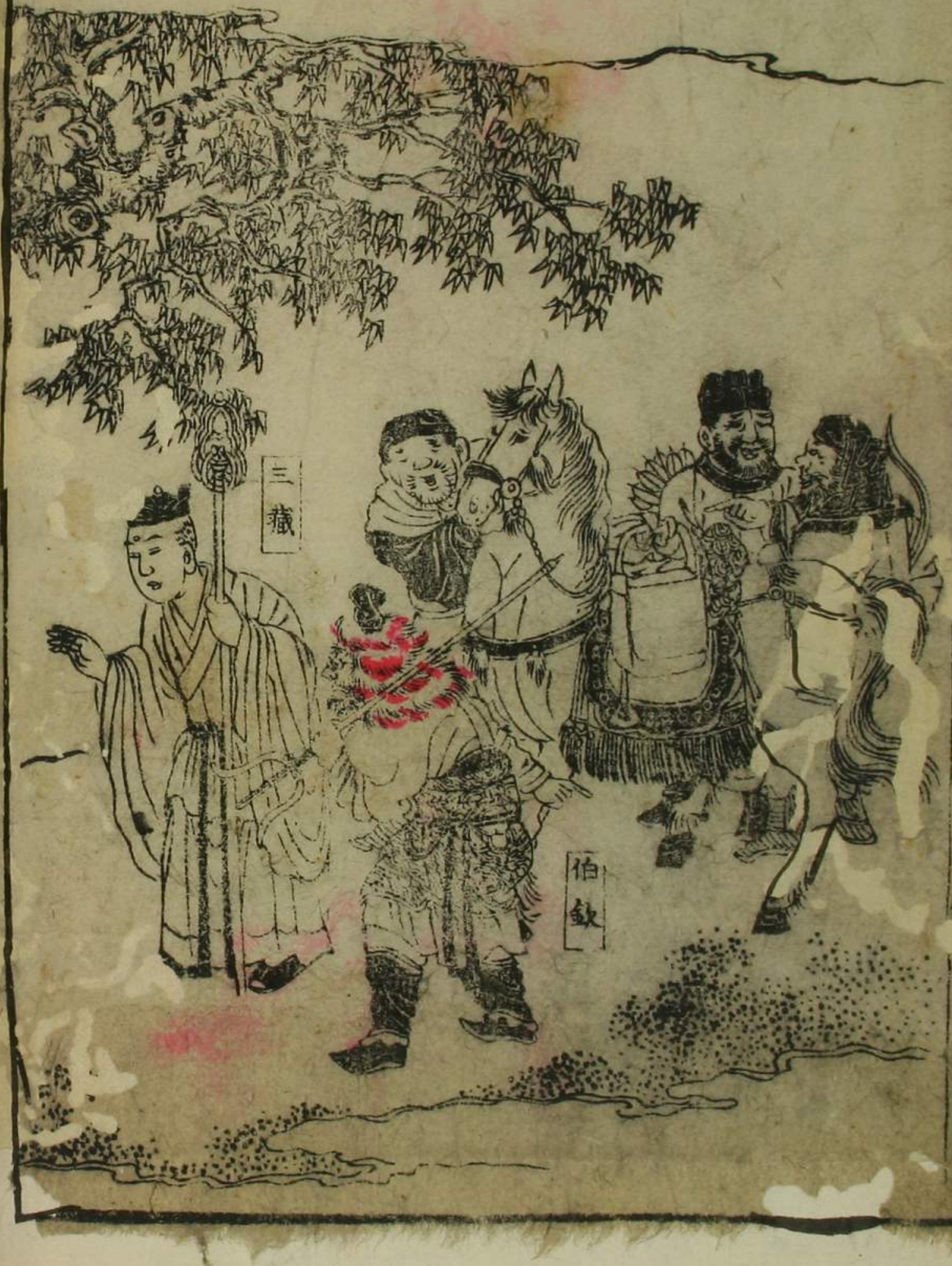
の地の虎狼ハ我を見て懼る事は故に其は境越しかじ
名残ハ後さぬれども是を佛別中べしと立ぬらば
三藏馬より花下扯留て復何の日々相逢なきとて夜と
洞を流し別まうてぞあうらる

心猿歸正 六賊無踪

三藏 伯欽と既に別ま入し路入け山の林森より我師
我師よまうとて鳴るる名頻にやいられハ三藏おら
かのでく我を鳴るやと名をよみて伯欽中るハ山
号せし我大唐王西界山と改めむあしよあり
漢の時天よりけ山を降し下り一箇の猴を壓玉神に侍て饑

西遊記

悟空謁
師始願
從隨



鏡丸と喰せ湯とるはいぬ汁と飲せ今に至りけ
猿死せぬ中侍
必定りの猿長老をさうのくおそり久誠三山を下りて
さて三藏を導き山下にまれば果して石の匣の中に一箇の猿を
頭を出し、子と延て三藏をさうのく長老の大唐皇帝の勅を
西天の往く徑をさうのくし人たうはや二藏の曰く我乃の身
你正を問て何とさうのくや猿の曰く我ハ五百年前天宮を周せし
齊天大聖と申し者たう如來我罪あるを以て所に押入を申し
出る事と申しはまれば向く觀音菩薩宮にまゐりて
長老の弟子とたう西天まで守護し切をまじは
善果を得しと
教へし師以憐れを垂て我をさうのく
佛供養し西天を去り
三藏の曰く你のくる善心ありて之とも我のりやてり
你を救ひ

出えんや猿の曰くこの山の山嶺きに金字の壓帖あり師父これを
除きむる我即多を申す下り
爰に於て三藏伯欽と俱に山
上りて見よる果して大石の正面に封皮を
の六字と金書したる三藏近くよりて
隙を去ん
時忽ち香風一陣吹来りかの帖を虚空に吹上西の空を
行
されば三藏伯欽再び天をねりし
向の猿大ききようはと師父を去て遠く退き
吾は所を
かまらぬ
下りて
三藏の馬前に来つて再拜をせし
中を猿の曰く我は法名あり孫悟空と申し
三藏の曰くは我



虎ノ歩



悟空以
棒擊虎
路上

カ
ラ

王

悟空

...

們的宗流にゆく合つる你うかたらとらん小頭院に似たり我又
 別名を孫行者と名はくへしこそ遂に師弟の契々とむむ伯
 欽一列も告げ西と東に出ゆまは孫行者行李と背後に付
 進みくる空をぬきことある候間より猛虎一足跳り出三蔵よ
 死らるるを行者みて大驚きより師父恐む事なれ
 とて耳の中より如意棒を引出虎に向へて只一棒に打殺し
 一根の毛を抜く尖刀と成し虎の皮を剥く身にやまひ如意棒
 と傍花針となして耳の中へ收めし三蔵は始終を見て大に
 驚き你いふふしうかくのごとき大常神通りや行者等して
 曰天地の間にあらざるお我に敵を事決してあらはれ中
 旨今はくひ一鉄棒に込も時に上天に達し縮め時に耳の内は

収む則竜宮より取来り知る三蔵とすてたのじくおひ
 馬と名めて進みしむるは思ひきめ後縁なれ或は此の
 外山より宿りし言しを往後よその初にたりなればおまじも
 名まして拈塵の中を公不そるるを忽ち路の側より
 六人の前経ありしれ出まに鎗刀と合せて路を遮り合ひし
 行李及び金銀と我く中へはまきしるるを斬り捨んとはこ
 に罵られれば三蔵おそれ驚き已に馬より降り行者の手に
 下し師父より後おそれるる我れと通拂えんとしらるるに
 こそしるる你等何者なるぞ名の何れか名をいふことなるに
 應しと名をいふ其一人の眼着喜一人の耳聴怒一人の鼻嗅愛
 一人の舌嘗思一人の言見怨一人の身奉憂とをたまりる行者



御入馬守巴力編

竹野原

真本

与野原



悟空與賊
戰於廣野

悟空
カールワカ

日原

悟空

眼

見

御入馬守巴力編

多し 你等 原来 六個の毛賊 我ハ 你等 三人に 公より 野の 野
たの 財寶 其ま ば 取出 して 我ん ども 一人の 賊 文 きた 怒り 陰 謀
の 刀と 拳 銃 行 者 と 中 亦 どり ころ 八 方 より たく かけ て 破 う け ぬ べ
行 者 自 若 と 多 くの 毛 の 一 根 も 破 う と あり ば 六 人 の 毛 の 目 目
らん 食 せ あり 果 して みる たり たり

油漬

遊記五之巻終

東京牛込細工町
池田屋清吉

翻 倭 唐 隨 國 近世戦争書類
譯 軍 軍 筆 々名所
書 書 書 物
繪 書 滑
本 本 簪物
御
曲亭馬琴之作
其外諸先生作
軍書
敵討
諸家騷動
御捌物

右々外數品此座に記されし程奉存也

書物債本所

東京牛込細工町
誠光堂 池田屋清吉

英名在る書物債本所

